浅江入楚

完

823
.M8N2

25

Freer Gallery of Art
Washington D.C.

蛍

廿六歳 右近大将

玉鬘君思憤給事

兵部卿宮叅西對給事

源氏君放蛍於直衣袖給事

五月五日出馬場殿給事 騎射并観馬事

源氏君宿花散里方御物語事

永雨中御方々翫繪物語ホ事

源氏与玉鬘所物語事

天台法文事

紫上為明石姫又翫物語給事

夕霧中将右系明石姫君御方給事

右中将依念玉鬘君夕霧中将御中好事

内大臣夜不忘撫子語又見夢合占事

螢

玄 以狩并歌為其名 秘曰

狩けるとてきこよこの夕つくとおかくれとてくと

河 蛍ハせくろ身をのきこえ出てそいふちりまさる思ひなりける

玄 源氏廿六歳の五月のかしこ又螢の巻也 秘曰

弄 源氏廿六歳の夏

今ハかくおもしくしき 源氏の今ハ摂政しめることさてそも

しきといひよこされとし皆内大臣よ申すゆつりぬへきを天下の

掌たりつくまじまにし

のとやかなおありしありめくるか そもくさくなりゆゆりぬ

よ源のかたくしきれふかまひかそしたらき公かくし

あの人きこうへさを聞つかくて 源のつとへさきの人ことを

皆人公さへつまりし

こなたりよさのまな 秘 六条院のおりさ給し源の御光昔て

おりつましたりかし 花のさかりを見てきたり

出てよりかしてく 物のさえよふハ宮のめへ公しきてよりし

うらめるおもちつきさうらし

あいの姫君こそいとおしうきわかし 玄 花ハ源氏の

きらめとののかすか小蝶のさくのおくよまるし

秘 對の姫君ハ玄のうこころかよ源をこして秋のかうちよ公と

うきをすつるぬらやまし きとし

かのぎんかり切りし 河 肥後国大夫監なり

秘 源氏大夫監なりしのちちよそ子へきふさくちぎれとし紫式部かうへ(ひとこと)
かく思ひちらようけてとく人への
さ夜ことにいうと侍しと
　　玉かつらの巻 秘 実子の字なうらに紫式部か給ひとし
えんりとふさくけるひちとまことしくおほしこし此源氏ハさやうまハ
あらそ人への思ちん衣ぬうとまことしきこともまたことなりと云り
何事ととしおほしうり
たし君のおほ(む)わたに　　秘 玉鬘そわ事とてけるかれよおほしきうとし
又とりかへし　　秘 夕顔となり
　うたれすれよ夕顔とおほせとおほしくこそとこと
おもしともうらいくさか給ふハ　　秘 夕顔の柏ぬかと其の中をよまれしうり
たましきなきとのよこともにむもかつ見つ　　なきたらみのよこともに九條邪
安 たましきなきとのよことに　　ゆめと　秘 夕顔とありけり
　秘義よハ清濁の声へとさうすと此朱川わり真義ハうるれし云語こ
たさやうに申し見ゆく　　秘 玉うつぬな住へとくうしれわうハはこ
む 人かうし云かのふれなり　　ゆ 和と
人か夕顔の手くかゐよ
む ふこやうたうのむし　　秘 ふこやうまふくあいれとこ　　義こ此此朱川アリ

いうくまめうらこうほし給へと　　義 此此朱川アリ
安 実ことしくむかしし積重致のあるこ
　　ゆ 積労の心と
紫アとあそなりしゆ 　第二のこ
ねひそれかといふくさくなりぬ　　義言朱あり
む ちかきの労なりといひつきとし
秘 らつ労こいよ云ハ紫アとあハ年労をしてさの年月をへつくいふなる
とあのふうつくハ云きれたもこ
日 年月をへ給ふすハなきれとしこ
さうるれよなりわかうれくと　　む 風明叙王集九条右大臣以爪
　四君とし此くきうか
又云後しとあの心月日ハあかなれと夜月なるよさくなりのよきうかぬ
信明集 又月ハ嫁要といふと云あんハ夜月よなうぬこあさこよ遠くつきとこ此 義こ此
計代よりいむといふうか夜月あめこあさこよへとうかうしとうあ
うつかきうつのつうハされハいうくハせへつきあ月夜よとなりにきうかとた
のおとしうつきとり給ていてやさうけのくれ云しくなりぬとらく
鄙云なうく岩さうりしくなりぬうハ夜月夜あうくいくよゆつれたれと

本文よりおこりたり

たゞしよき人の忌べき事にこの五月雨をいみたてまつるか、五月雨はむかしよりいみてまへといへる

今案五月はいむ月なれは菖蒲とてかゝる五月にあやめかさしなとすといへり　古今にアリ花ニ

弄　五月にはかならす忌べしといへり

秘　五月にはあやめ長き日をいむ月とて五月ゆへさりの花鳥みえたり

箋　私勘　冥苑日俗以五月為悪月故忌ニ云ニ

さうしかうかき

秘　みな人の忌に見えたり、此又なり

かれらんしても　源氏　源の君の忌にさなき事はいとまなくかきのみなを

まかへとかんと思ひわすれしとてあらしなきもの哀なりける事

みえたり

臣　帝範云　是寒時心乱

人ゝのこゝにかんしとあり　さうかゝんこと

秘　玉かつらの源氏はなりしくにたかへしなり

おく君の仰わたらせきりに宰相とありける人のむすめ

玉　夕顔上のおやは三位中将といへり　宮は宰相ならぬ人を

その娘を今宰相君といひし夕顔上にはいとこなる人也

秘　夕顔上は三位中将の女　宰相は兄なりしむすめなるへし

玉鬘にはいとこ　秘　玉かつらにはいとこに夕顔上はいとこと

三位中将　夕顔上　玉鬘母

宰相　宰相君玉かつらの君の女房六条院に侍ひけり此人をいみするさまなりし人　竹川に玉葛よりさるへく出ありけりと出くる也　臣　上にいへる人の源氏へ

めしいてことのほかの御ありさまかくおほせられなり

うせんとせしおりの御哀とは源の君の御ありさまかへりて

秘　物おもひわすれすとかや

源とてかたみのことなど御事はかなきことに　弄　源氏の事かたみの物の御かんさし給ふとてゆかりと

とこの物のおもかけはゆるしきことなり　好みのあまりにはかなくゆかしかりける

うちてわすれかたけれはそのやうにしのはせ

秘　玉かつらの君

源の君のけしきかとのものもいは給はす見えたまへはれへくあらん

何ことおもひはなれかくれ事あられぬと思しきこえね

玉かつらの君のことゝもかたりしつらきさまを源氏の御ありさまなとをも

まてあはれなるとなりにしものとはなれとはよもすゑの宮にゆかす

とはしとおもふはなれまつはとも也

臣　此一段の詞はさしあたりてあはれなるこそ

源氏の君はとのの御けはひはさうしなく

源氏君はとのの御けはひのかきりにおもへるかたちなりしかうり

よそしきたくひなきといふよりも常陸宮の姫君の御名
あるかの事なりとうれしくおもひやりおほしめしけりといふなん
秘 常陸宮の姫君のきゝしきはらんとしたまふのみなり
少将は常陸宮のとしはなりとて此わたりにかくつゝしみてとと
まよひてかなしかり 弄 このあはれなるは常陸宮の
たまへるはれさる夜とらんとて源のこゝろにおもてまちは心わかやは宮の
ありさまにおもひれたるとよるのしき夜ゐのありけるにこゝく
うれしくいひきゝおもひおほしまいしうちとも
いとしのひやかにおほしなり　常陸宮の
つまとの中に御ありとも　同 蓬生
孟 末は常陸宮の姫君とり給
そのきりの心にきかするよ　秘 源のとりかたくかなしのよ
わか御おもひてしりかたき　孟 源氏君の女君とさかしきことゝ
さてしらん　とやうやうとしおはしてと
むかへたりと　秘 源のうくしのみてと
峯ね君のありけりけりあなかると源のいのみてと

いとしきたれはあはひのさらさらひ
このくおほしけりたりともおほしき　弄 源の御心なり
さてよりすかりぬやうさいのもしれさりとさとのき　常陸宮の上はくまくおもふ
うちいてゝおりよかの　孟 末は宮の峯ね君よれのむといふ
秘 宮よく針とかりしのみて
さてふりよもきかくさてはわりて　好色のさいかりあつく宗ちく
さて色すゑくなり惟ゝくれのみて
わといいとおほしと
峯桐君の御せうそこ　秘 宮の御せうそことつくへかし
いさり入かりよつきそく　式 峯ね君よつてきつく侍そんたより
おもてとかくとし〈ゆかしめ〉て
源のおもひすとし峯ね君よつけてみるとりて　少将は月し
いとあまりあいかりしき　秘 末より源の玉鬘のこととて
式 まつらしきとりよ心よ文ありきに此ほかのそくの詞と
よろこのすさ夜よさてさうしてく　秘 さたくの妻のそくよ
さてさういひてあはさてけるのて〈き近代文あるとはさしくあち

あかへきるゆへそへてハあやきこと　物をそへてのありかハさたかならねと
源氏のたまひこまかくして　秘 玉かつら乃君
いとゆかしけく　秘 源のゐの
ことつきくしさへいけり
まかりいてゝ　玉鬘の御許へなすハ恐れありとてみてよ源氏のたいへ入
かのいゑへ公ハ心ハむつかしうて本下みれハまことにおかしき
なりけれハとことなりにきこえし人　を こよなく源氏ハ玉かつら君の
文の源氏のやまとうたを宮にいかにうりやうくといふかハ源氏君の
奥のさこれ本下のほとをはなちて給ひてこそいとゝうちなけかれたりと云也
秘 文の源氏の返事ハ宮のかきかはしたまひけるこそ
蛍とうたにきこえけるこの夕つかた　河 几帳の帷ハ三重なるか物とおもひて
綾裏ハ縫父御中倍ありときこえけるとハ裏なりけり　袁兼延云
うちとき寝ハ不審　伊勢物語ニは車を女車とみなしてけりきこえく
とうくなるめくあひつよかのいつうか蛍をとりて女車よいひけり
あかとは蛍なりとかやうに車なりかへらんハ蛍火へ女をうらみ侍る
を うちかゝのうへいうくこのありしれそこれらんせんとおもひとよれとあるらむ

あるハまとりせハりのしいくにせまうしとおもしおいしまれよ蛍お
りしまれ源氏蛍にうつりにミツヨツ源氏ハうひありくうへ几のうへ
ハみてあへうかうとれむしさくひちそしみちくらかうへ入源氏袖よ
つゝミて源氏給ふよあはれんハとうかりめ宮几ハいかくしちいへやさま
らよ蛍たてこしもとめてやと侍ふ夏上ちらし東か行めしいさ
いかちらにをなりかて朝ちいらけ給ひつるか色との心ありり
蛍の光うつりにかりきてをかし蛍をとらへくらつゝみ袖よつゝみてりく
まいりてらへき宰よこらさくし蛍をつゝみなりにきこえつみにまらく
いとちく源氏給へしつけてなりそくしは袖よらつとりてかくしそ
りそくまいりのうへ内侍のかみの心さらつゝい給ふ本下の心をとらかうして給
て物おもとめのまよこの内侍のうへ心をとらかうきこよ蛍をさしむせくつみ給ふ
かへやすきのへハさかりにとりの源氏の心ハまうてつゝまれハまいハ源の石
なくらめ今案うつかな物語の蛍をこうして心ハかうとりの源の心をと
袖よつてとりくさゐしとせのへハ内侍のうへ心なりなり蛍をさしり侍りぬへその
たかりみのさうへハ車流白沙の庭よ蛍とりちらし夕を照らしてらみ
ありか云へくよあるしうりくしてい又ハ此物語ハ源氏の君の蛍をたわむれつゝおかく

めつらしき玉かつら君と思ふ心に今はせなかりて添なしとまさりし給
いんと志の人(右とこ)相当とうれきうに此夕つかたおかしくて寄りかと
又右と海よ几帳の帷ハ二尺五寸の物也表ハ綾裏ハ絹又(絹中倍あり)を
きぬもとは裏めくることと志ろき小かり本丁の帷ハ表裏とも絹也
但本丁の帷よ夕つかたより覚えてをとかしんなるハうすものなる(寸法
あすらしきことといふは青き匂衣の袖ゟ見きりうてと思ふる給
いろかの御様とをの公開ひくて下の匂よかくしましたりて
かうつまハかれくいかとすくす源氏の袖よつてとめつるを引し
給ふ右と公かね給んよほくちゝり給ふゆすくるめる

秘
花鳥やかた説て公

弄
禅閤御説本丁よハつらをとくさきのもう丘衣の袖よ作ることく
さうてさしあら給ふなくし　此義不然とうつ衣给なを丘衣ハ袖つ
らく　あしうつるわり但めの夕つかたより青き日かの　あかくし
きらうらんよ　揚葉こありし
扇とさしうつしかうつかさりつゝめ　秘 玉かつら
おろそかしまうそん　秘 源のかくやうるかもて

父りのう義　思ひ給へき也
よるのむしあとと　秘 此父ハ源の内侍あとを渡給ふよかりくかくかとある
とのゆよ奇かしへし
いとろうしをくしあやんハ　秘 源の内侍よ具しうるとさるかて
源の公と思ひ下文し源の御女といふはすくも公とのあかつらこたかと
本ろく海うしこちあと志ういひけれとハお祈さし思ひてうるうに
しわりきのよ公と源公とといふてめさもんとし
由とよのりの姫君　弘 花ハ紙右の細こりの姫君ハ明石姫君之
秘 萬不子とこ実子の明石姫君あとありハうしかなりまき物とよし
こと分りやうとう思ひうつていし　弘 花ハし
秘 源の脇りかもて
家ハ人の大いなるかと　秘 人とハ玉かつら
人のおれうかとハ源菅中よ為のりて家の執筆しかのとこえ
又玉かつらとかんへく御へきと
御公とらゆきき　思ひて家の公と
玉かつらは寧くてひらうまいそ給ふまけいつか

えならぬさとりのくるしさ　　弄　本下
さと後すゝり　　一間ハかりあけ
あはくらん　　河　含ホノクラく明
箋 私云此詞今わかよ云こゝかのかゝみんとるゝ詞のすこ
かのかたりけん　　定ま一切孔紙是白楽
秘 こゝ此さへ公をとらし 河 つまとかりて
えんなりことのつまれたゝくしれへく
式 数多かりすのそらしめにとたるへき後のすゝとのいつて
さいやうよふし 給河　箋 大かうすかをと
あれこと　　河 如葉と
秘 葉のこころ源の北君よ子ひかうと
箋 宗家 なるこゑしきこえあむしのおかうたくへの字門まはきゆかりのた
弄 あはく声しめれぬむしハ覚とさのおかなにきゝよきて此ねこい
ちんやうへのおかハ音とさへふつかなれハ涼きくつかましきすとよ
秘 なくことゝしたゝき忠のおかさへ消ゆくまへのおかハいうしと
おかまり給ひぬや

うるさのかくしと
これかりとそ
西玉 歌ゝハせん身をのをこうれかゝかゝそいるりりかとかおりハあらうん
弄 人ハおりふしを云よいこせたに公の中を目くらてお目き数ゝせね
忠の花かして拾わり待れと女君のあす河しおつかハ君かおる
ありけり此ハ女のハ執かつめとりふるを
秘 云ふあゝくいうかハなつくさうしてのをあゝへしさ此ハ音となりか君
のおかしそ源くかんて給此也と定ハうくおそとう給さくハおるたなくさうおすよ
くるれ君ハきとおさへつるとて　此巻以下被頂く今以卑定しまで
箋 私曲葉並名并秘ノ箋おほ示アリ凡おかとふ執ハ云にあゝく云かと
なれハ世国源さしあれ君おかよりゑたりく云よあゝくしいそれ
昔ハとらんねして云より後さかり源切のおかまくわりれとおほとを
おかさなの人わかりよかきゆか執ハとならにあくれかよいハ云此しそおか
れ源さにてハあれとさくへて玉数おかくらみ給おゝへ　文一箋とそ
つりおかのおつらわと云てたゝくあく宗の人あしてとみ詞れて云は
おかしさなよいとゞり合せらしてよ君わかくへハうりと云界よいうかりや

秘 久しく世葉すゝかしいうしと
秘 遊蔵ノ時まよりみかえつ

一ト時ハ数多ありし鳴虫よりもいたく侘しく哀まさりけり
〔?〕てと云ふより淋しき風情の哀さハえもいはれんと覚ゆへとたりハ
ありてたゞならぬけよ云なし　猶あらへし　面白き中にも哀れ人の
きゝしよハと云ふハ中々くありて深きと云ふハ自然にこもりの
文三行孔紙に白勤如来　秋後拾遺深草之蛍と云ふ人をかたとし
哀しきらく哀れよりも蛍ニして鳴虫よりも哀れなりけれ
はかなく打おりし　蛍なく式拙よ云ひしとて集を披見し侍る也
尺おさく載之

いとたかりし　　右　いとかはりくよりくるしあり
秘　たかりしにたかりしと根をはなれてとききさにかへ哀のうらみ
孝　女君のおいたるハいと不足なり哀の心のかなりなり
ちかくたくやうなりハ　哀のことわりあらはしとたゞく帰り給
月捨あり
新の古ぬくしくらすに　時の気色に有明月夜よなりてくきに時分にと述
やれくらくつらし　秘　寒くのもしき流れたる夜の月けぬは浮きにとてあはれ
かうしきにたりとおかれ　右　四五月更雲介語　二三更後雨中壱

右　五月雨に物思ふかきくれて郭公声ふるく啼くていたくわびしからん
秘云　箋　わかれくの行き故川云ふとに朱点おりよく叶ふ云
右　郭公かゝるよきにくれしとは其の鳥の心の程を郭公によせて必
云ふを詩の上（すきこと）を云ひたるにしあさはれたる事なくかたく文あ
とゞ夜ふかくおのゝよつきさく古今にいつはりらんの声と思ふよせ
こゝかくもうかゝる文云ふ哀は必須をなしつかんと云ふ心を郭公によせ
ていおかりしを払遣古へかくれ
秘　此眼ハ草の子地に古今に五月雨に物思ふかきくれける声に似たくある
物思ふ哀れとりそく哀色いれ給ハさりき
少　此事の気色時分れなく（きの時分そとゞ）哀をしゐきとりしてく哀を
読ておかれたる面白し草の子地と　秘云　一声山鳥曙雲外
万点水蛍秋草中　前よ蛍をおもふく流して云ふあり
わけかの時分一声なく（きた郭公のすかは此語あると）してく面白きなり
秘　文ハ深くよく似の上（こと）
流々いなとの哀すあらしさハ　右　書女たやのかり
よくハいとめおやもらちてく
秘　毋のことくとりりちのかれし

うらくハ云つゝく　弄 源氏の文なりけりと云つゝゆゑ 秘曰
箋云私也義不審源の好文の名なりて一順云てうしく云つふと云つれへし
私事也説明へし
玉くさハうきの花をもしきと　秘 公つけのよこしたくハらけしかりへし（きと）
ワからゆかりのうらさそかし　弄 公うらき世中とかけけれく
人のこゝろさくへうかりしかりけん　秘 実の文女なりしにて此て返し
わやなしにきゝ申してまつり
只のたまはしきこゝろへからんとし
人わつれわりさ後にそ此事よ世てゝつりよやかりん
ことなりうつれなさ後ハうつハしたきよし之源の実子れハすれ此ゆへこ
てさうつこのつしき方れつのおまれかけとくへきてもいうしと云るなりて
此のハ歌とうに申しけるよ　弄 源氏の君ハまうくれ君に織ハ我れしゆく
てんてんと云かつ事と此公のくせなり秋好中宮なりしてとも一
ワつりハかやうよ見て後の日なり
源のゆかりしけなく家抄ハりまゝへきことハ文さてかの後たうのこ源の天
然の此らせこ少日

弄 常によろつれすゝと思ひしと源よ中宮なりとりといへり相通
私云弄箋めすおなしつらし
中宮なりとし　秘 秋好と
いとうをりしく　少 実ちたつてうけたるかくハ此のたる後の（と）
面ふことあきこちの　秘 中宮ハきそこら此方よもく玉鬘のことくに
こゝし後ハさうらと
此君ほ　玉かつらなり
見うてかなしけれて　源氏の明後ひらかなる秘
六日よハむまつりのれとらに　花 かる六條の殿ハらしたう町なる中宮の
ましまし方こ
弄 東の此らこれ西の對よ玉鬘君のしつかりる傷ちう義なし 秘曰
つ并てよわつうりたり　此 女房にたまハる傷ぞといへりされと玉
かつらましまにつこなれハ源氏ハつりのつこ然アなくの御りのよ
後私ん　私云アなの文たりしましうる時の月夕やとるもくとらう
四日なつハ夕やをふとハたへうり私と四日ハ夕月夜のかとしほこうし
ありねと文らもりくの花の新夕暮なるもるく云とくしきといふ事

いうもろや家ハよしや姉うし結りし　秘 ふしんの家にすみとうといふもこと
いうくしきこうへうつりしきけるとい
秘 粉をちらしけ給ひせそとと
人の心やふり物にわやまうち色を備しき人ハ　男女のわりハたる
あかとなり男女の心へまたりそ乱手あくへいて手物そとと
いけとこわしと　な いけ川 落 与 殺 へしつと云錦と
花よは此家そうとさうへさうしたちあちやあくへつとくよきこてあふまし
きるなしりしと宣ひそく又家ふくくいうくりあらし出しし出したしわうり
きそひうりくへそるやと宣へりさくいけつこうしつ宣ふといふ也
いましゆん　織し　聞言と
はやと父とこありいうりあるれたるよ　に 巌 又 巌
多 使やハ父のおよありの地と狩くりしまつかきようれ芳物あるかとと
秘 敷父といろつやといふつこしつ後ハ父のありよるの物と
哭つやハさうたしとい小数の雛様と　今世俗にきんといふ物る
この世への女をあけうしさうりと見るへん　日しく深くうる父し世の事

ありハあいしさく父とちうゆかりとなり
つまの父ともくあまあやめと　な 菖蒲ハいはとおれとし五月あかりハ
時とちへてめうしくうきさうりしとと
何つうきに雅楽なり深の子すといつくにくりて的かきよくにありん
とう義そくかやうよりそもうかねと菖蒲常によなるの地あかれと五日
あしは君る父とそをつかと足へあまりまくありしまよりかとと
多 重日と菖蒲よよせそくいふり
菱又此菱業と今ハ異なくし又菱用集
秋あ果浴る并秘ノ菱此所ゑとよりやあやめと菖蒲に浴宜して
こうくくハ五月五日菖蒲ハ父しうありうし御手れとりさにこめる
しうりねとは六条院の玉樹ハ常ニ外父しるる菖蒲しきまふハ雑変
よめつうりよ先ゆかうわりとしてきようをよおつう此名よ云て
あるへしよ只菖蒲の衣とハ川捨て深の衣裳の文殊尺くつかる狩
ますうへきんもる時ハ花の羽よつ公しこありかいうりあるの所そるそく
深の衣裳の継ずすと云しうかこも羽の来とこうくへし常に外各く名

これその名目しるしには一へかつらにかけしきことゝよろこひ給ふよ
て給ふりへしもすを下れ云ふよ菖蒲とたてつへきせそくらへ（き）
細かハ舞の義よ従ふへきん
以上とあらハ　秘 王鏡をめ云と
此源の好文のむろかしかつ給とと　或日
此出私宮源を親のやうにおもひて実又門大臣の女とたつまて侍へ
あはれんハたりしかつりぬへきとそよ云ふため
文とり御父へおくり　右つれ文より云ふうへ（文おくりこ）
志るきこうしをやうよみく　な菖蒲の根ハ志ろき所よ白菖根よふれ
結つりさりて君よとおしつのあやめれ終のこあはれんとよみあつり
秘 あやめの絵かりたよりあり
是ふ申とこしておりしき作ものハひいつ似てことありことぬしや
秘 若ふ子地とその打て思ありすと後うつ似たさとあきすあると元
と世との心とし〜へとうきり
若之家 さよさくやあらくへしたる哉こかくもいりおしつのあやめれ終のことあつまん
川へとたりきこかくれとハ公とよすかへしろき身をうけよりふうと

あやめきつかひかりしこ家ハ公つとひか似たとこあやめ草の根諸
書よなく（讃こ）
気めしよとりいとて吹へき根よ　表 古記根のあやめあり
な讃古を みつくまゝておよつり五月のあやめ草たりきあみしにくハひらあん　毛之
人業ありき所よむしといつけよりハ根ハ吉とたつくすにあらへ
てあらわ源たりとといろくりとめし
秘 一段とちすハ根ありへし
松あやめ草の根ぬたりきためしよハ是とそてあまよひへ似と
いよハりちきこころあるへし
ちよあの讃ありなとこそ似りしおきらく出給ハね　秘 源のいさあのよこ
君のへ心文へ女ふよ似すよしてめそき給ハて源ハ名謙れおりくあのよこ
秘 くことの也
これりきりし
御公よとハつく　秘 らうつく女すのそうしぬつこ
迄あら あらたれていとしあさくしらゆのかあやめ草とわつれあつれあうり給の
な ささあやめとわうれハ古とあやめ草と古つあ旦しちりのあやめと同
あやめとわつれハ何の分名をたりきこ下れ根の一字よて菖蒲とは

菖蒲とも書ハ菖のちゝれの根をとりてもえをたらしてくすたまに色
異本 菖の出る所にあはせたる事とかや　されはあやめとは何といふ事にあふちの色とかく定
たゝしき流くらゐなりけし　花あやめより
はかなくとゝめけり　玉あふの詞とつゝみのうちにはかりし紅かへし
年ふりけるは面白きと云也
異本 菖をとらへくちなしとも　なりしかへりいはゝかくしきと云文
聘しのふ詞と　秘 玉かうれはの緒に
まとい結ぶらし
菖かの菖の出る也
いさしのおもはし　あやめとは不定にかなふ緒なり也
秘 おもはしく見緒はきかんしとは夏のやうにかけて見緒んと
菖玉の花やしおしはかりの詞
箋 私 薬玉と号するは始末詳ならず可尋也
くすたまなと
前 續命縷　五絲　称薬たとへり薬玉称之
宋書曰元嘉四年断蔞至日五綵縷之属　金門歳節曰
端午木盛艾酒以苑洛樓臺髪二揷百草結道造仆　樓臺形令薬玉穀也

避兵已佩靈府小續命紫縷長（文集端午詩）御記曰延喜十三年五
月五日丙午縣取奉薬玉（玉撤去年九月茱萸以茱萸替　玉懸巻帳柱前例也）
延長三年五月五日丙申司立菖蒲親絲所奉續命縷如常
五月五日条取薬玉供去年菊替を撤して代り懸柱に結付之
昔武徳殿にて五日節会行はれて騎射のありし時宮内有典
薬官人おのおの献をもて内侍薬玉をもちて以下の緒に付玉を右の肩に
かけれの袖へ出て二の緒をとおして脇をゆいてなかへ帯にかけたり
箋
私勘　事物紀原曰百索風俗通曰五月五日以朱條繋臂辟
兵及鬼令人不病瘟一名長命縷一名辟兵繒一名五色縷一
名百索又曰示婦人蚕功成蓋始于漢時提要録北人端五以
雜絲結合歡索纏手臂初学記又條達織組雜物以相贈及日
月星辰鳥獣之状文繡金縷帖畫貢獻于所尊古詩繞臂双條
達鷗詩五色双絲獻女功多因荊楚遺風又云綵繡禱功崇喜
續年章簡云皇帝閣帖曰清曉含坡香朱絲續命長一絲增一
歳万縷獻君王　又云肅舘初成長命縷珠囊仍帶辟兵繒風
土記云以五色絲絲為百索絲辟兵鬼神也

おりしもいとゝうつり　　秘 蛍宮ゟ西給之
公ゆうしめて一とし　　公やうにとらせ給ふなりしおもふ事也
れ前しくいゝへのきぬすてゝいけり　　秘 源の公り給ふつすなり公の
きこえてくとへ人の家まきれにとつてふるまなくしうるとなり
源なりの御返ありへ人のおもふてのきうにほいやうと
殿ハ到んし比流りてよと　　秘 花散里也　殿ハ源也
中将のゆふのつきさ比手つかひの流いてよ
秘 中将ハ夕霧たり左近之人ゟ引つま之第ろ人（一さとも）
行 左近殿射志手番之　五月三日左近殿射荒手結六日志手結四日
右近殿射荒手結六日右近殿射志手結也
行 私云　五月四日ハ荒手結六日ハ荒手結也日記と
宗たとくくなせ手結ま荒手結とて左右ま各友義をとく
な 手結ハ左近の荒手結也五月五日まありり夕霧の中将左近ある
夜まおのことし引つまこく案九すのよしと給と
寿 てつかいハるらの時二人つ流りいて射ありん但来勤之一勤
さり給し御く　秘 刑宮し給ふとし

あゐしくうんにハ　秘 かりとかまたのゝつらしに六芸低りしく
わりとハ人てききをいかすと
むまうまのおとし　行 馬場殿へ　な 女君まみゑる端のおとし流り
らちゆハさ宮流おそひ不かしてあり花のにり吹出おもそせてとを
こなされたらよりて　秘 花散里の恵そとあるかいこ
りつきこへて　花ちりさとへにさうつ女房とらにときなり
左のつうさまをうしあの宮人　な 宮人ハ格盛　格曹肩をいうと
行 宮人孫乃之友と人ゟとうりまうしとい宮第のうのと
夕いのれてうふうりりと　秘 おうつなりり
味宗上御方と　日私云うつそらし　玉鬘のよし
比そう比ホ丁　行 下濃
だ 末濃とハ几丁の帷子ハ白くむらてと宗武ハ紺よ深そうと
寿 うへハ白くて帷のむそてと紺ゆうくと末濃なりまいり
上世うと車の下むそうへり　如此
さうりゆうさりの女れあつらん
菖蒲重　行 菖蒲重　表ハ青裏ハ白也
面ハ青裏ハ紅梅也　異 朱アリ

うさわひぬるとりの　同 二藍
四人　身ヨタリト讀リ　他 標ハ面ハうすき色裏青ニ末濃ハさえて
あふぢめさそこのも
を染りばさりの紙なへし
身 同裳うちも色れたとく多くみえ青九　一襲若きさのこれわく衣
なりとのやうにはたかぢこさそたりとは勿論こ
あそしこのわか紫の色しうるか衣　同 薄蘇芳こ
なそしこハ面蘇芳裏青こ一説面紅梅裏青こ色ハ花よりさ
とれハ色こわか紫の色ハ櫨麦の紫よりくろく裏青ねこ紙ハ薄蘇芳
本ヒ河海ニハ薄色と
身 同うつのの色あと色も色めす一襲若裳をとき時居さるかと唐衣と
いよぞめ世うしも盤上の門符なしハ色ヒわか紫の色と伏裏色
えきなり
こあさのハ　秘 花の宴の星の方こ 身 日 箋朱アリ
他 湍打をうきねさうかきかこ
なそしこ夕ちねの如きス　他 あそしこの上皆よきるせり　箋朱あ

夕ふかくこさら
身
てつひとしおぢやおとまハさ夜かりうそさけうらうれつけまいりて
他 侍うさの手諸よハ官人以下るまを多く的を射るかたか出けるすり
さ夜かわかとハ大やけをきハんてうさ山よりはりく糸くれりのを
かのとは射ることとくまいりわけまりかとさ夜かりかといふへしく
手諸よハ大人なうり射るかとも日ハ上藤の近けうちし射るを左
きうりなりとし言へしい河水しおぼ通たりうへし
身 左右をの諸射ハ左すこ中かねる不射く左定説まてハ羽林とて
かまるとけうて　一揆勘
秘 一系ハ左右けるすよハうつゝも相うりかすかむりかとさうとなよとさうり
一系よハ中ねかねる定めいうりやとやうりむ為ある説わかいうけて先
同 させうらハ治ねなりけり
ご行りうてさくえんたうかけうそくをつうしくかれなりけうかまちにし
おもとそうかて　同 身を捨てく勝負しうかれ
他 先ハ競るれまとい ふなりける協の手結ハ諸射とてる争く多く的

と射ゆみハありけり競馬のすゝハたゝきと五月五日ハ
節会武徳殿にてありけれハ騎射のすゝもそして競馬を
おこなひ六日又武徳殿にて十列の競馬ありき後ハ
なかりき五日ハ五位已上の人々えらひたる馬を御覧六日ハ宮の
御馬をのりて競馬なりけり又長和二年五月十六日左大臣の
上東門院の御所より競馬ありき競馬と云ふ例又騎射のすゝし
ありける紫宸褐衣を着青地打懸布帯ノ末額（ヌカヽツラ）を例用ゆハ地
錦打懸ハ布帯只用競馬の時打懸ヲ又万寿元年九月十九日関白
賀陽院にて競へありける東対を馬場にてあとく
わたして東面よりはるゝとそより競馬をそめて又騎射にて行ふ
西宮抄六日競馬左右十列騎着末額左赤右青 近 左右着青 接腰弁
南面榜日 左右 着臭衫ノ尾箱ホ也 又諸衛ノ射及雑藝ノ装束皆有
例ノ色目更不𦀌記又左右近衛打毬之輩装束柏巾子ノ冠黄袍
靴ホ各持毬杖　延喜近衛府式云騎射官人二人着皁緌緋
布衫金書絹甲衫金畫曹衫近衛四十人細布衫銀書布曹衫
兵衛府式云右五月五日騎射官人二人皁緌深縹紫貲布

衫金書細布甲衫金書曹衫　延喜式凡五月六日騎射官
人近衛惣十人並着深縹布衫錦甲衫白布帯横刀弓箭行縢
麻鞋　今案騎と射とにたちの装束不同競馬まて打懸
とりて袍を着たる陵王の装束のことし騎射ハ褐衣を着たる
やうに騎装束にけさうと射りとりの衣んなりかはらぬくけ
さうをつくりてとハ競馬のさうそくのすゝ
てまとりし　叙　わらそひきあて
こかみのまつらハしとてへしとく　むる儀を少しよりまへとそしる
是よりおりしまれ南の町の東の対にてそのうちに見る人々八几
何とそ云り
たきうらくたちしたまと　たまきうらくたらひけり　打毬楽（タキウラク）
納蘇利（ナソリ）ハ乱曲破急武徳殿已上 箋也　私云平調太食調打毬楽
黄鐘調ニ乞食調打毬楽アリ
を六日武徳殿の騎射にて打毬のすゝありける人への装束まて
るよのりて毬子をちらしらちしりと打毬と云ふ時奏する楽
を打毬楽とハいへり又納蘇利も六日ハ競馬の日雅楽寮是を奏せ
箋 打毬楽ハ必ゝ祭の時の勝方より奏せらる也 右将謀に云々 京花云此義不審

かちまけのらんしやう　　口結の勝負ノ後乱声をのすること競馬
相撲競闘鶏なとにもみな近衛十二年寄子代合にも勝方乱声
あるよしみえたり競馬行幸ニ蘇芳菲左狛龍右と書すと云々
又陵王納蘇利左右のやうにお継ホしまた無例可勘
と かちまけの乱声ハ必競馬のすゑ上東門院陽明院の競馬
にも毎度此乱声ハありしこと又競馬の行幸にハ蘇芳菲左狛桙右
此舞をとりつゝく此曲を逆ニしてまうなる紫宸殿のやうハ保延四年
四月宇治左府ノ記ニよりてありけり蘇芳菲ハ吉弥師子のことし有子
二人面形如犬ことし狛桙ハ龍形二也京尾舞人こうしはいつれもかれ
ともにいくとりてたつなりと
秘 乱声とハ勝方ハ乱声とて必大鼓をうつなりと云々増薄れ
競馬にも此面形ハあるなり
と打とりとりの舞　口 左衛舎人こ
おもしろきはおなしのことくとりぬ　少 蘇芳菲ハ左方ニ源の度のこと
若ア家の　秘 源の組
人ゝりけは　秘 人ゝりけハさうかれなりと

よしとふへとなりとてあれと　秘 秋のとまり人ハあれと見るもの人かしとと
よう義やうあらんへともあれと揚かわよのとうるハもしきおとゐよりれハ家
きとりふ公を　少 ようしとふへとさかとたる義抽かわかと若菜星れ
人のひきんと詞を前をしこと也う
義 御読ハうらめ義人ハあれと揚花ハう義人とのゝ公也
秋秘ノ義ニ同し此読御ん　少 若菜星
御おとりにして　秘 源よりハ少ホかくまうしまつしと源ハけりくりんしつかと
どうしう紹くたりすくさん此若アマ家ハ御先生ならかねと
又きゝ源を北中よくたいすりあるよ源氏の御方よ行すもる
時ハ必此家ハたゝもすりと
むすしれうらかつりかく
さりしを　秘 若菜星ハあつさ女御の円まんれ比円にてりよ
行し給へしさく源も人々ね給つあつへし
みちれんこよく御し給へと　秘 若アマの中きし若菜星此つあれよ
御家のすをりしおりたり

曰 王気色（ヨホキミケしき）

たわきミぞりしれ

秘 源氏めくとと　弄月之

ふとみしを給よきりりと

秘 花散里ハらく人知給ふかとて

にかてく源の西暦よとわたらぬ給ハさりしと

なれあのとたらしともわしとて

ゟ 今日此君んよみこうち

あまりさましまたとて宮部卿宰帥宰なとの人ハたらしとて

花散里此対よりきをあそび

秘 紅梅弄花の筆跡へきん

人のらへとあんけけ

河 雅

秘 かやうの花念をつくへし

右大将たりしとうしに

秘 頭中将今宮此文の事と云いて給

らと玉かつらのすへとも思ひうくと云ふかの給

ちうきよう中のあそくらんハ

秘 源のむこあそくらんとす

ゟ 頭中将と玉かつら君よあたをたまらハ右大臣よ云ふすしあらんと

こよあらりして也

源の御中よいりの云かのあるへし

いぬハさうたのさ此流もてい

秘 花散里と源のあそびのいりせの給

らいハ今ハなきさうしたりり

河 名別し

おましかうてことくみゆく

少 別しことくのこの字いたれたしはへきなり

秘 ハの字あ読わりの一筆ハ対字の

おとゝらくれぬれもあしるとと

一筆ハ雅

秘 いかにかやうにあらひいうの中そと源の

給あるもの字対字あそく紅梅へきんめり

弄 恨をあらし給たる

あかやうやとをそてたきこうへ給たる

そのいしいうしみたてし紅あるへし

打つしまうつけくうれわらいとしてとくへつくくまのと

秘 花散里此のさあろくハうやうのうらえしめたなり

ことなうる御証あるいしすうさ給ハ

きりまめ給ひしかり給の

あまごとなんハ夜の此方此給あまさく此のわかりしる也

花散里 その弱とすうかれ葉中と名けりあそ給けのあやあなるやりらん

河 紛来三弱その弱そやられよ葉うよ葉ハとりうりんあハとのかたん

ゟ 良とと他んくかりんへわのとわやれ葉あやし弱候あさりうり 直弼

今葉菖蒲ハ弱の食せぬ葉よあれハ直なあれとさうり直なあ奴ハ不

愛しあきハ此わやめハ一しあるさよあき此乞よ菖蒲をとらへさるゆし茎よ

みしかり紫式部のすまひなりとて、くらんかうに
つかはさんかたらんやなみなりとて夕日の影るまひはまはらへの松かけに
紫式部の事

(寿) 菖蒲といへる食せよつかこ紫式部の事にて夕とうかされし今日の拍子
さなりところの町の打りわいうとあくさへうそとし
(西原入) 鳥もたりきをたちふかはりの弱はいかにやめよむきかりへき
ゆらかこるともそふよあらいつかあやめ芳ちいとらへてやまつうあん
わかう夜ハかりきことありて方染まよりしきはねの玉ねのこゑともう夕
ともなき夜延ちうとの弱よもとなくへうれん
(む) わかうゆいかのこともかなき夜延う見し弱くへの日すかれにこゑと絹と
多うりおかとらりハ一統にてハ菖蒲よ似へとよらする芳と源氏の
式部をわかうゆよかし女房と菖蒲よ夕とへ似おとりさいて
式部はりのましきうと慰むかしと
(寿) 紫式公よかとりハ桃紅と秋とあつまかの鳥なれハよ似へりかうこも
とかくわと弱となつきも川ふうりへきてとハ紫式部と源氏の巾中
こゝのするとなりつれけり

(秋) かけとおつ梅の香あれハ桃紅よとりかこりう夕ハミのこりてこれともやかし
とに野してうけとおつふかとハいろりかりつくへきハ紫式部と源氏の
内中とのするとあうつれ宮へ方り紫式部ハあくけあうこ不明
あいさらな義内ことゝもなりや
(寿) どの絹れさなと
(夫) さハの内方れ分ハ弱て正さ本めと隠路く源氏の正ても仰ん絹なあらす
とかのめし源氏ハ文よ分鳥にうをとなる梅のといひて女房に似て
やとりくれとも川かりのまうきとれ夕つかハ源にあいきうるき
内あこと物語の文よう義ともあさうりと
(秋) 紫式部ハよう秋ともいひあし　源ともまる夜の方れ見すそうりれ夕つ
いつれも優なりさうり分とし
(少) 風流多くめへ名と　萬子れ地と
秋夕れ色もてあうのやうなれと　源の絹と秋夕らそハ絹たる夕子
あれとうらむきさうへさ夜あれて論紫たるき公とののふなりけり
のとやりよおさうりのへさ夜
(寿) ゆかとハ源氏によりつるすこと　(秋同)
ゆかりとハゆかりの紫て結ひて
(秋) 紫式部
(む) 猶代の家とハ源氏よゆかりあつ紫式部本丁川原てとして猶那猶とい云

くまのゝ物語の絵ハ業といふ古物語なるへし
ちかたなけなく
源氏の君のたはふれなりとかや
あかつきのゆめを
細 如月なと
あるまほろしのうちにもとりなりとも
箋 古き世のたとへなりけるを一所々に見えしと
御かたしく昼ねのさまなり
いとけなき人ハ　絵物語りつゝいとけなしかきつくれる絵の物語なるへし
おもしろきにハ　昭君などより姫君へ絵なとをまいらせ
御心の對にまて　おもしろき絵ことゝものなりしてまいらへし
つきなかりける人　細 おもしろき御方にハ絵なとかくして
かくれなき人へかまへてなりなり
箋 朱雀院の御事也
上臈にくらへなんことたらくもせおほりひかとうしてすゝめて
母君の御かたとらなりけるかの宰相おもひける女とおなしに似てまれ
ともおほえたまはぬハいへるくいたしくさて後悔のさてまてかなと
あまりことならぬこと
さぬくにまゐらかなかへの　けしからぬ物語にいへるへんことゝ
主人なしの姫君の　河 住吉の物語なし
住吉の物語に中納言の娘こ人あり中にハ一ハ宮ばらにてかたらひあと

心もすくれたりけり宮つかへさせんとていとしめてけかとまこし
母ハ腹のむしにあり給ふとやしらてかゝるをりにてなん上腹ぞ
此おやこの姫君はみつかりていかにつけてもいかにもとつきなく思ひし
三ぞう法師とうさいけて姫君のこゝろ對しいて世にせさて
中納言に出むかひすましてとなく宮つかへのたまうの給て後
内大臣の子すゑく宰相右兵衛督なかへにあはせんとすなりまし母
又かくへのうちつくゝ七十ハかりなるかきつかぬさとつれたるものしけるか
よめのを得せんと多くかりそくへのうちのかくいつはりとさてこめて
ぬけいでゝ姫君とかくわたり住吉といふ所に
出ひて住吉りけれハ住吉の姫君とわりてこもりきゝてる物語
うらへし今案住吉の姫君の本世にまかりたくなりさうかい物に
こゝかへれしそのならハ住吉ハいかにもとそへのうちにお
そろしはかまへのかけるよしそへかしれ給のとき
弄 住吉物語は継母のまゝし女に給しつゝ人ハかりのは女にあはせんとて
又に父と云人主計頭と云者くつけき男とまつし女の方へ入て
男のまへくへの女にうつふしにあはせてゆかんとすゝの姫ハ優なるなれハ

さしわたりもんれりハ　秘 言鳴と云ハやうを知へきとと
兼 云時と云ハ今ハ今後云后姫君の女御と見へたり今ハ世にありふとと
きえんのみ　民ア首の後宮を丹々を悦友寮こ
兼 又物縁小まし女のちうりく又は継し しきなりまし　又云
かとくしつりもん　かとくしハたらんくしきへ云ん
河抄 定つく后記これ去しうめてとのれとわちしうめともらし　又
花 わとくしきと云詞万葉の字ヲ指遺と云ふ後撰の詞ヲ
かとくしきくとわりハ云ら云ハりたれうとく出よと云也
れとろくしきなりと云詞也　秘 しるしの物語絵なりとこ
打ち物とこのちりりつ
あかむしつり　須の詞
明石の姫君又むかしより比御分の比陪をちりちりみ前と
女子そ物うり行ふ　兼 うかりし物とほと
秘 物うかりしかうそといつ云と
少将女の物よあれに数寄うり云と
人のよわきむりもんと　少人のまねえう御性と云

河こつれのうえれそつりしとこうそく
河伴 打かしきれいとうそりなりけうかひこのまきてれいこれ月夜れは
うちされの月夜をまれ月夜を折てへしてきみてれとれそつりしきく
てと云かハ月夜の中にも女君の髪うちきやうりしとこうそく絵とら
二さのまそいきこ
秘 髪といつり　郭公とうちそりし　河ニ日
又うし後世のふうかことあるをくハ　秘 かやうしれすなしくくハ何すか
てうあくさうみのすつくきそとと
いうつくよ云そこう紀　兼 古今序絵まうけう女のうす思こ
秘 古今序まうきうの女ととくいころつよ情とうしこうにとこと記
旅うしうけるの姫君れ　花 後撰の姫君れうのし
兼 姫君の心つくしなりとといさむしの心と
秘 御うき物語よう申しれうのあまうこ御の姫君れ公つくことしやと
いさむのいと云ハさや方の方れ云つくうしこ也
志りうよ又きてたくみそ　秘 二女ととうあてたうちなきるすと
おりいつくるのと先うら云あよい思わうくうのとおりふるすれあり

少 おとろ〳〵しくきこゆれともいふはちかけれともなかなかおもしろき
なりゆきもはしめはさもあらぬなとゝ
むかしよりの女房かたりは　三女女房なとに
少 明石の姫君なるへし
ものよりの〻　少弁曰 ものきてこうの物のさまのつくろひことを
いひなしけるへのいひいてしゝかのうしことゝ源のこゝろを
さしもなかりしやとは何のさてよきもなくへしとも
何しもなしや　秘 かやうの物語たとはちからたりぬきこゆるとてこのみことに
私弁 書きかへたりいふおほしきはなりゆくへしさゝかくはえこまうしき
ことに玉鬘君へ源のいひけるの詞とおもはれ侍るへくや
弄 玉かつら君の詞
けにいつはりなれたるへや
玄 玉かつら君の源氏の侍者の物語をいかにもつくりたるものを見給はよくよく侍と
おもふかくらへてゆかむあはれと源氏はさりけり御詞とは後源氏
一説のこの此説よりつかゝせしは後にとしきそゝことなるへし
秘 先此下玉かつら詞
秘 源なりとも侍とせしなりけるかくへきさきてわかれ公
さもなんかへし侍らん

京極公説 若よりは限るらん無理作物かたりなるへし

あつかはさうしらく拾置しゝつゝこと
あらたなくもきこゆれとしさく　秘 皆実のありかねと其骨より
おとしてくわりきかうと源の腰懐しくのかまゝと
神代よりあり
きるしおきけるなり　弄 嘲しくのかうへなりけり
そきうの物かたりは日本紀なりとは唯かたはしそかし　此絵物語なとにこそ神代よりのこともあらめ
日本紀たゝかたそはそかし
河 日本紀廿巻　舎人親王撰　私云 舎人イヘビト、ヨムとく　此乎秘メヤサレキ
玄 日本紀三十巻始神代至持統天皇御宇一品舎人親王安麿
等撰之　今案 神代より世にある事をしるしをきけるとなりとは日本紀のことを
先ありそとあつかしては物語なとにはあまりすくは侍者の物語のかうこと
君臣のあひたはとしたる日本紀押さへてたかくはたゝ大概ばかりそ記す
なきもの歟よ似者ふたりなりともよそて道々しく詳
することあれとも源氏の詞のうへは玉かつら君の詞なり
とりなしてのうへとかたりくらむもの〻くとありて女君の
おもしろきものかたりなと

そのへにうへにゆるくわりけるに　私 是よりハ源氏君の世のありさまを言也
秘 源氏物語ハ下ニハ紫式部か物語を作まいらするさまをあらはしくいへり
荘子寓言と云者以己之言借他人之名以言也ト頌せり少月
よき事もあしきことも
後の世までもいひつたへ　多 又なくさあるゝひまに　さる人のあしきことをつたへて後
生れ出てしめとすゝめのし
よき事をよいしめてハ　秘 さればへんのあはれとそさあく
よりつきてくいつけさゝれと世の中によるきるものいはれをいひさなく
人にもきこえんとてハ　秘 紫式部か作てこと心よくあらはにして述かこ
ひとつの所しのさへほゝりあくしかりの　私 人の所しのさへほゝります
唐紙の書籍とおなしく人の作まつりたり
多 ことこさへくつくつきつくへきこと　蒙求 背柳 紙日
秘 さらにハあこし一たとへしつくりあはかりかとわり無窮なりされと
日本と唐土とのさかひハ文字のよ書たるに亦の作りやうへてハ
是無名ハ同しとわり云々

義言荒唐のよハ人への所しのさへほゝりやハかりかとある　三不如此 以 和国
お 形しやまとの国のまゝありけり
私 和漢ともあるへからすありと仮名の詮ハ後代の事ありにさりしとく
るすあれハ皆同なりしやまとの国のありとも古今の出あれ
とも編なるへきとしハ云々へうたりし
秘 文餘在学よりかりわりて也早朝の経の作さ又云の内にて源
源氏にて文の一向よ大義ありくハあまりしきことにて絵
物語と申出けるのことし　私 葉集にかまの人のかんしとのさへ
作らりゆりかハかおありしやまとの国のことハ日本紀と
絵物語のかたをとりよりや日本紀ハ神代よりかきあしく漢字を
用いまたれハ人のかんしとの文をいふ又著をいふかよわからへし
是絵物語ハ仮名なるへしさて今の世のよきをつくりきたれ
同しやまとの国のことハいふかあるへし漢字仮名と著と
みとのうちにさ国かいりさうの相ありとこたるものハ同し和国
のるかあれハ絵物語とてさと云いて述まりしきと出けて源の字送

佛のいとうりしき人々を年ごとにおきて給へる御法を
以 経ハ四十余年に経し説法し給ひし方便　五葉の　五時の
其時の平等なりけり
を ありし天台宗の義によらハ法花を実なりといふに対して余の
四経をハ皆方便といへり方等経ハ五時教の中第三時なり
われらの天台宗教の御門にハ浄名思益の経と小乗と弾呵して
大乗を褒美せしかに方等部とハ弾呵褒美の教と云二字に
判しるて説給ひし凡佛の方便ハいろいろ相を摂をかけて説
給へるなり　今きこゆるもとろみへりといふ文あるをさて方便と
実とハいつわりにハ文にハまことの法とハ法たれと縁と楽を立てまし
正法ハ定まり方便ととく此実なの二相をたたれて法をさて一実たる
理せしむるに一首よきりむと三界唯一心心外無別法なれハ理も
煩悩と菩提とハ譬へハ水と氷とのことし水と氷とハ只一体也まなこハ
菩提の水とあらさるれハ煩悩の水とならしこそ全分水
此相よわるは善悪不二邪正一如の理なれハありかたくよろつわりき
ハかりなりあつめよろしくいつかハ何をすむる　切らすとハかへる前後の

抑諸仏名号たのもしく花よりりて道をゆく一也ハ判方便の
諸教と定めたりかりの方なりのへしと仏の法なりけり思きて
ことりりとのへまて
武 此経やうやく実とありけれと教なりしあらせて実る証拠にも
まことのかたりしめよ定め此煩悩と帰りけりにかつくへきとて
先花厳をと説のへるなり
尋 方便のおかりしかをもゆしてき方等部にすゝて迷をさとしき
先つ給る方等経とハ諸教ゆ入かして大乗に入る御門といふとあり
ゝり平凡如来出世の本にハ凡聖一如善悪不二のことわりを
大悲の心ハまつり花ふるてもすなりまことにあきらかりきと
いふに此教にあらし実報土の大を現し仏も報身の色さし
説法も三界唯一心の法なれハ仏の色も法もうらかりしきに
しらかへし　花厳経の名と
尋 蜜経大乗の法を説のなへつのハ　佛のかたちこれをしへ時にをさむる
たゝり思へんといへるのありりて　花色の菜ちよ譯こ

次第に不共の法を説給へハ横教共通より次第に三七日羅
時説よりて大乗をやハらけて十二年権教を説給ひつゝ其中
に阿含経一向の小乗と伝と方等般若法華涅槃を分て説給へ
深き事の此時よりて始まり機ハさとりやすきのみならず修行
次第の教ことに誰もつきたるゆへにかくもんよろしけれ
方便とよまれけるなり

秘
若約方等と会初より大乗を説給ひつゝ佛の本意あれとも
衆生の機いまだうけざれバ先小乗をやハらけて権教を説給ひつゝ
中にも阿含ハ一向小乗なり

其故は是等のならひかくしこれをもつて説給ふにもつぎつぎに方等
経の中にあらわれたり　　　箋なるの義右に詳也

同
法苑珠林謂説来説得説の由也
阿含経ノ四諦縁生ノ法門ハ全く如来の本意にあらねど下化の機
根ハやしなひて縁を修行して法界空の理を悟る事
只此方ハ一乗ならずと云て但空偏真ノ理に落ても
衆生に伝へて機をさとり真実の方等経の中に四教と

なしくるまは説ましませハ浄名経などの仰も此時善之
所とりかれをつらなくさとりかれをつらね今のさとりかたし時節
化の衆生にて悩給としてかの会に須菩提也日一舎衛有空諸
乳しく迦葉並に三千よふかハ皆其悩給としてのこに一向小乗
是よりもつて説給ふ小乗大機ハ直に円に越或ハ別に或ハ
通に或ハ又ハ三蔵にとゝまりさせて四教並対の教としていハ又

秘
弾呵の教といへり
いまこ衆生の起縁無ハせずこの四教の大小乗をなしくたくて説給ハ此
時に昔の所よりかれとも今の所とりかたし探さかくおかしき此時に
狐狼野干ごハなりなりとも二乗の人をあさけり所かなしむの経
を見て迦葉並に三千にふかハ皆其悩給として一向に
なくといふ事後年空の理を悟りて弾訶さとりやすし方等
経の中にあらハれたりとハ此るなり

弄
花厳三七日　阿含十二年　方等至説時　般若廿九年或卅年　法花八年　涅槃一日一夜
仁王ノ説法然二十年

いりてゆけいりてゆけはいよいよまりて菩提と煩悩とのへだてなからん
いりくゆけばいよいよにわりて
一実道に帰すると
同　一本用三類一ノ義也
同　此時説法ことく深く法花

悉くノひとめ
むねとおわり
あるへのやう
かへいと悩
とのてつり
白わりり
するゐ即よ
非情之種子
前へやまちう
いへ所のなり
むねとおり
さりよ前経と
煩悩のえより
ハ道皆煩悩
こ菩提より
らハ煩悩
こそく菩
提こ

般若網経ノ会ハ彼阿含ニして砕空破の空理にさへられ方等るに
しりぞく有空諍乱せしを今皆悉空と説て彼ホの積をゆり
そろへて有空一会の所よりをわかちて法花をいひりくゆけん所
むねといへる又般若よりさらに所乃法一如の会にて
秘 麁と法と一文一香をさしなりて純一実おわしてお(?)の法なきて
がごいとかんありその為にアと

口 煩悩即菩提生死即涅槃

葉之以為経一部のおこ任ある已結のおりしきに至よみてそり方便とハ
法花已前説教と方等とハ方等部乃法花を指而尓前の諸教
隆匿至法花絹樴に一縁悟一実円融之旨文煩悩即菩提ホ
悉所とられて菩提となりまへて煩悩をめし□ホ為し
箋 花為上ノ勝ニ変
次 法界統ノ門能わかれくこる麁と法と一文一香をさしなりて純
一実相わしても文字の法ありし天晴日のかり月くまり蓮葉ある
く梢葉ハ細く(ホツ)しくて悉領るなれのことりそれや只天しれハとすしてく
とのつりご時のゆくりハうりたりりめ彩すゆりくとなしとりゆりと

なく説なよくいへとりし方なくへしと実とは白己四十余年ハ
悉実なりしとろへしうりも菩提と煩悩との為ありりなきたるハ我女
無諸世界の成仏小さくきこらへうり寿終の角ととくて鎌とくハくたむと
わかれ只こゝもしれあ為と及久末開会の時ハさかりし煩悩菩提と二あよ
立て生死涅槃の二路よ為して或ハ方便悉実をわかちし尓前尓後
とうさくいりう今法花開会れなよハ此妙偈と箋無双わしく全く
尓前尓後とてこさうりし二妻三身無自性なれて三恵四熱則毘盧
身土煩悩菩提本不生なれハ生死涅槃又空只の開為こみれ是じ
法花得益の一機れ始終なりりつらくと実すゆとふとそれ八千
余年の方功も皆小わりくにかよわりくハ法れ為虚仮の方便と屋
しりく始く悉実まゝくまりわん化一代の佛法文ハさむくなりハ只振捕
の字へりとゆ法さうあそのにようへし

箋 仁王経上　二諦品云菩薩未成佛時以菩提為煩悩菩提薩
成佛時以煩悩為菩提何以故於等一義而不二故

秘 人ノ善悪ハ菩提と煩悩とこ悉皆天台ノ法文をいてくなりけ宗或アハ
天台宗れ許可まゝてを受て宗旨ときりわなり

よくいへん
よ事やに
いへんかふすと
しむかしから
まとの家
地し同ふうの
とつかくて
いへんとふ義まてやうなま
公いいハかく
中けんよふ
系統こ

よくいへてすへて何事もむかしかれに
善悪不二ノ理なれハかやうに仏神まても皆真実の理にかなふ也と
物語なりしよきことなり源とつけての語ハなりと
秘 源の自称こ
玉 丸ハむかし男女の通称こ又古人の名に九麿れ
二字を用ひしにかはりて又よみ字をくりへてみな丸なとは字
有りなにハ只みつの称しをまろといふとのれをいふこと
秘 愚癡なりけり
去なりの物なり
寄 河の姫君とかかし
りのいふ君
源の玉かつらをとてしてそ云
河公のやうにけり
多くいなる義物語ありてこせまつるへからん
公を物すりまにかりて世まにさんとも
玉かつら 玉かつら北の方
かかをかしいれ玉かつらの称と
さうまとてしかくめつらしきことハ
秘 玉かつら対
源物すりもしほかすとて世まかれハ
めつらかにやおほしかしてまつこなる義なる也

秘 源の氏家とて世にあかしたる義をもつてとりつかれと
又玉かつらことくつれなき人ハ世にまれなりと
秘玉かつらハ家をとらいかしとの語へてこ家と又玉かつらをとめ
つらかかくへとおりふしと家かこ
よりあふ思つかさ殿いとあさかれなり
よしハ家なりけんけり
ゆ あさましハ日公たる
原 思ひありむかしれ語をとうかんなるとおかよそひもかうみそてい
秘 源の命こ玉かつらをと実子ありしてれ語つり公ハ有かこと ふるき
ゆ 不煩 日不化
ふけりかハ仏のこうかと
五 四十花厳経十二云地神常言我負大地一切所有及須弥山
不以為重亦無猒心於三種人常猒倦不欲任持何等為三一
者心懐叛逆謀害人為二念棄恩親不孝父母三撥無因果毀
謗三宝破輪僧如是三人我極患重乃至一念不欲任持心地
観経第二云世間之恩有其四種一父母恩二衆生恩三国王
恩四三宝恩如是四恩一切衆生平等荷負善男子父母恩者
父有慈恩母有悲恩〻〻 世間所高莫過山岳悲母之恩逾

於須弥世間之重大地為先悲母發悪言子帰随重或在地獄
餓鬼畜生父母恩重経梵網経等自余経説不違記　祕 出所アリ

かうしく　玉かつらのへしく直なるく近なるわりと

近 玉かつら
ふるきあとをたつぬれとけになかりけりこのよにかゝるおやの心は

祕 源のこゝろくたりける心のかハ古物語なとにもことにみきこと

公たるつりしもれん　玉かつらのしくつれく源のその心を祕出あると

かくしていかなるへき御ありさまならん　孟 玉かつらの行末を物語の作者のこゝろ

祕 若の子の地と何とり来いふへきにあとなりけり

むつかしき心ありへし姫君の御あつらへにことつけてはすてく

明石姫君の御あつらへとなりことつけハかこ浜けなりけり

ゝ後まて物なり

又古万葉集なと順集にもありゝ物の物語なとうれ

古 古物語　フルキ物語　いかの物語なとゝ云　清少納言枕草子にも此物語

まうのおもとおりのんわやまりし古物語也

玉 河海ニ此物語の絵とあり古物語と云ふと縁けたいらの物語とかけ

かゝ又心のゝ物語と云ふなとありえけらぬと心後とみえ海もの

ふよりくこし葉ニ物の物語ハ枕草子にも物語の名ありおせり勝説

とりつへし

いとよくかきつゝ見るとて作らんを

りうともり作らんするりと

おいさき女君のなかにもとなくてこのみ行し　源氏の心くれもの心く紫上と

玉 こゝ後の物語の中にもあらさるらん

むかしのありさ後

玉 紫上ハ此物語のうちとみやさき昔の心の物の宿世あら　祕 紫上の昔のありしと思おもひて

かへりハもとらうたいうふ　玉 思し物語の中にはあるへし源氏の

君の家のありしまゝとくの絵へり

まうすて御かりし小と　玉 九と右ハ右ありわり

紫上をも絵からやさしくもてなさるゝと

きあらくいおありうなとしもいこれをあらなかのありかし

たかうなる世にあるなりやしのるうつまゝるうしそ何ゝるありわと

まうりつらかのとしけさふらふへまりゝきりとききこうへなのよ

玉 きたいつ双紙とも源氏好みなりけり

若の子あとしぬるもと　又源氏のへいおりつな語るもと云々

好ちかはしつらんとはらんちかはらん　・出名又一本アリ
私以上箋にてとく合点以下同之
この段の物語にきく　いとくなき事ぞとてうれわるやうくし
弟子地と又ハ宗匠の詞とのこわるかるゝ心とハ弟子とての事也
又源の君かはかりすと好又ハうんかる詞也
私云源氏の好色れうへまさくいおかろねるまりてさぬくと
かわわりふとりて見ゆやさて君のかたなしてふるやせきこんめり
いか君の御まへみるく　源の詞と　あわしれ姫君と
みそらふつきこうかりのていよめ　少宗出るすれ人也
伊勢物語にみそらるゝ所といふり堤宗の所とありみそらふを
人へりくらしうる妙かまみのと
あいの所うこきし語りにもとき語りへくなん　上の詞にありかは姫
君ゆゑといふくハりくさそらき語りしといふりかのとく此后の姫君にハ
世よあれうの物語をそうにあらみきの数そらちつ云流く御ちらるき
といふしか語り
むかうれ少語りし段ことの所女よハうやうれ云つゝいのあるけめりと

おりハ語り　宗匠之者物語として此中に同し
く人云本そけるかく人まう程として
やうあるすとのたとのゝふこさ〳〵ハらかなととくらいつきて
うちれ若原の君れむよめ　若氏なれ一世の源氏人の如く異名と称と
かまいこれ人へのいりし　かとなといりとつゐすよ内へまいりし人と
これを称まりなりとのゝよみなり
かう〳〵かれ物語り　若原君とく一世源氏よく右大将後さより
といふ人へ其水方を二人ありちりつりきちか一人ハ桜殿大臣の娘
一人ハ時の所円れ此妹后腹れ女一の宮こなりりこち后腹の九よ座き
ありくあその宮と戸みめ云むられのつりきたれハ東宮となりしめ
なありそく時のいはしそく少しつゝへて一云とうくちへよことへてよ
ハ云つよくく東宮へまゐり語妙れ中に源かぬるといふ人へハ桜卿し
とく山へりこりりてあとにこちふたつかくれ給はすかよきうへハ所為を
得をとりてくちら筆一つてやうく後入めた宰相蔵人中納言節刀
まうきをとくあつくあつおそろしきさ故ちうかへハいまとおり
をなしくうきへ久へを流つしとく内裏へまいりけるとも

此門の人給は何のなきやうにしをむかうりもれて男女のかまへて
らる流しつかりしぬ又こなりの大方と云人は家にまたとつけ
こやきこゆるよしらく山よこうりぬれば此の源筆をさへるく
右大将ので内さ中納言忠文野宮大臣といの子に河院
女御の御服藤原忠平ゆきまさ左大将又実頼 河院のたちのねば人々いうよ
せんとたとしれ君をせ又つつい給女房なとそうついたく
此ならあきていれ給ひすやらよりり兄をたりりたるにし
きこ人なりてわやまりのかしと云り
秘 なるよ人ことより数多れ人のとないて内より家りし分り
これもなまりたとのめしこ
すくよれよいはいおさことわすこも女しき承かし
さけなくりてなしてかまへ多こりして又しも給たる源筆 を いれなとな
お兄たりり志なて実しさりよい又何りに又しも給たとも
若おより岩にの千世の命さは昔のかの家のそて志すらん
志ねといたて多めしわもせんもとのこ兄は命は君たまんに
よ給りの前これ猶よれとわりり又ゆき内されたる忠平をよめる

あそく君はよふしくまいりて此出給へとなきのこ志りの人を加給
人の出るつはせれぬをへしうせつ此てぬ家しというとのの人を知り
兄ホを始として女しき承かしというてかまへや
うれ人もも 此 現人へ
を 兄よりは又源氏の祖うつれ人は現世れ人もといふらし此人をして此人を
秘 今現世の人もかくれ人もなまこりとも承とさてそうかくへといふり
義 現存の人へなうつて
よき承ゆえにあるへぬやかりしなりかねあるやのし
義 つまくぬやといいなしそくらしなりかねとぞれ対よつけそる
きたこく又乃分のこと
秘 此公の字よりて後切へし出下の手雅もりまへきとなりの中庸と
笑 故禅閤作中庸をなるしとゆえのありりそうし
たしと给りのありりうし
よしなりぬおわやれ 秘 出給田しなしいさりとそく出大臣のなる
はかりまさく田のすりも一を心れいかは曲たのきるのなり
秘 よき承ゆえにあるへぬやらしなりねとらくへつけて給やの

なとしあらぬくこともへきハくそらのおりしきことにく
よろつにとにの人めのやうしあるとりの葉このまへぬるに
異こよりしたらるぬハよしあると
こめりしきこと
注 おさなきまつしきなと　未有
以義やの臣先しきハ大臣としてなと
おもれ志をさゝく
名ふさハいふと　注 立身行道揚名於後世以顕父母孝之終也 孝経
人をそうけ（きよし）　秘 よくそろてうかん（ハさ）にかうる所なんゆかると
こと紫のうへよりきちくゆくかあおこさうるよ
ゆゑうりれつらりさるをいふなり物ちうめ人のうきこるれは
さうしとなきうすくとゝくちくなめうる事なり
秘 なるた絵物語なとの作りさるをいふこてハ只世とれあるさるとなと
もんたとみてさく　人の慮さうる程りをふしあるかとりとなとなう
おうぬ悪本なと

なくてよるぬ人は
秘 此座右銘奇特なるの語と云なふなるか人のかわそこなふすれあるを
私意しなうく驚りるきことなるへし　注 崔子玉座右銘　無使名過實
これ姫君のてらんつるれ　明石姫君なと　世俗よてんなされとりうる
かわそうしらるまし記なと
まゝ母のそうきてこる物　注 腹黒と　實本書もあり
注 紫上ハ明石姫君のまゝ母なくおりしまゝ世て作者物語をかゆく
母の腹わうきうとうるあるさる物語をうきこうしう絵なとか
とりう世語て紫上うりう世語つるなり
秘 ちうきてこるきことハなれわしきことよまてうとをてくむなの君こと
さやうれうことをうるる絵物語なとゝとハなんしいと先りれたき
語つるこそ為の縁めて
波 元りたてとハ元りれちうんうと
中将君を　秘 夕霧なり
孝 夕霧れ中将紫上の方にハうしとうまきとなり
私 継母のうりちうりまうきいうなり

こゝろこそは
いとあやしのほとこそは　明石の姫君の事也夕霧もうと〳〵しくぬこと
わか世のほとは　源のおほせぬ世に今よりたのもしきむつひ給ふ
こそたのもしくとおもふやうにおほしめして
うたてんおりくぬらはのうち　姫君の御ことに有けること
あいたちんの女房はなるゝは　[右] 挑橋家には蒼鉛の女房たちこそ
[秘] 東上方の御方なり
[弟] 六条院の女房のさまなれは
あまりこしおりせね　源の御子はさらさらなきこと
たかこれなりける　[秘] 夕霧をあはれとおもふこと
おかしゆかしき　夕霧はあまたまめやうにおほせれたらし
ろ御心くく源のおほせとし
まつこいたきくる　これより明石君のまゝにいたけなくおは
そのさかとりふなり
かの人はりなかに　[右] 雲井雁のこと
[右] 夕霧雲ゐ雁といひかはしていふ事をいふ也

[秘] 雲ゐ雁のゆめと云おもへり
まいらすの文の文ひろく　姫君のまいらすの文つかへと夕霧は思ふのこと
うちかへされ　雲ゐの雁のゆめとみて
ゆるされすめへきほとりには　是より夕霧は好色の称をとりたへ
なりをさまりてふかくいふれはよとしめぬ事をしまきへなりと
さりかたくまなとおもひかへてられ　かく思ひめくらきへふとみなと
さりことゝまくもりかとし　雲ゐ雁より思ひめあへなり
程の身よりの御なと　[右] 六位宿世とくせといひしをりしまむと
[右] 雲ゐ雁のめのとの六位よくせといひしをすとされをきこへ
これの六位雲ゐ雁はいひとさめつと
思んことなきうつしまは　[弟] ことゆるされて雲井雁のめのとを思ふ
あかうちおたるとかくつゝひ　夕霧はいよ〳〵雲ゐ雁をあはれ
ちはかてつゝいのつやうなとはおもうには中〳〵心のへ見にしてか
さけなくそしこ〳〵なりけると思ほしとおもひて〳〵まことにて
せんくれとおりひいそうれぬなり
[秘] 今はちと志めやかの御けしきにて内大臣もゆかしくおもひつくへきを夕霧は

出まハ巣守にもみえて〳〵空しくなりきことさへおほかたと
あつかし物さまく　秘 倒し おれしりの名し 事同
ゆかりしミハりりまハ　秘 雲井たちりりまハ名をとりつくりんかりと
せうとの君さら　秘 柏木なとこ夕霧か中をいはらくさつてこ
あいの姫君と　むかうこし
右大中将　柏木こし　ゆ 岩りか中将と
いひけうの夏よりけり　秘 みかこたまと
これ君をとし　夕霧をと玉かつらへのさしりけ柏木あれむこし
人のうへおもく　秘 夕霧の相し雲居のかりの名よあり
むかしのちくれたらしうられ　ゑ 夕霧柏木の中昔の又君からわ
ゆかりいのやうかりとし
秘 致仕大臣と源氏の御ありいは夕霧と柏木と兄にしろいの舛追てと
うちれおとらしまて　致仕大臣と
そのおもいそさかおかしくへつり　此君からと式ハ母ハ見あさと
の窓月たらにてこういそのかくにおしいてかくと
女ハあまりこそ　系図まハ男七人女子四人載之

ゆ 右大臣と
女御もかくおかしこと　雲居の雁と
秘 立后あり
云め君もしかくことあつる
秘 夕霧と川つけ給と　ゑ 玉かつらの君し
みのなそらしこと　ゑ 落葉の宮の府とりまる
りのくれりおもと
秘 落葉の宮の母給　秘 夕かのうへなり
地ちかくありかもおもや
ゆり藤ありりつきりいく　史紫届てあと
多 内大臣給　さらたりとよかぬ師と
君うつたりとおもと　秘 柏木なとにさしてめをつと
これいとしのれしおもくて　夕かれをとのまつと
りのかんしとして　ゑ 惟光 ウミ名乃と 大和物語世中とうんしく
ゆくしまはりもちの人とけり
ほくあかりきつり　女子のあくたなを書こし
中将たのとハ　あつらあハうらふとれめしこ御りかとも今源のこ

うくとうしつき殊に旨とせて行まゐらせいとくはしきと
けかおりかもおしとうなりぬ　女御姫君なとのうちゆるゆるおはすと
夢のゆめのかく　　　秘内大臣なとと
旨毛詩第十一小雅斯干篇　下莞上簟乃安斯寝乃寝乃興乃
占我夢維吉夢維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆男之
子祥維虺維蛇女子之祥
史玉のうのはなやかとうしめひわくうると